

川西町は、古くは水運や農業の町として発展してきましたが、近年においては住宅地開発や工業団地の誘致等により、コンパクトな田園都市の機能を備えた緑豊かな町として発展しつつあります。

明治22年に結崎・下永・吐田・唐院・梅戸・保田の六ヶ村が合併して、本町の前身、川西村が誕生。昭和50年4月に町制が施行され川西町がスタートしました。



かわにしちよう
(写真提供:川西町)



面塚



翁面



ネブカねぎ

※ 9月～2月県内のスーパーにて販売

観世能の発祥の里

「室町時代のある日のこと、一天にわかにかき曇り、空中から異様な怪音とともに寺川のほとりに落下物があつた。この落下物は、一個の翁の能面と一束の葱で、村人は能面をその場にねんごろに葬り、葱はその地に植えたところみごとに生育し、戦前まで「結崎ネブカ」として名物になった。・・・これは、現在の川西町・寺川のほとりに立つ面塚を表した伝説です。観世発祥の地という史実と、能面を貴重とする風潮に加え、「結崎ネブカ」が事実上大和野菜の雄であったところから、史実と幻想とを巧みに織りまぜて物語化されたものと考えられます。

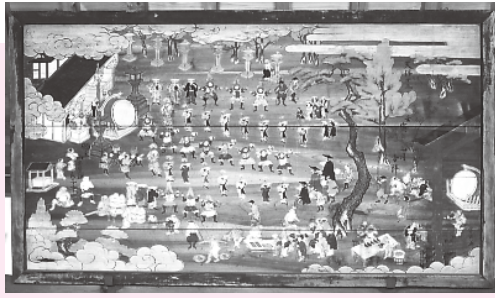
面塚は230㎡、周囲の玉垣は全国観世流の門下生らが寄与したもので、樹木を植えて小公園化されています。「面塚」の石標とともに、昭和11年に先代宗家観世左近師の直筆により建立された「観世発祥の地」の碑があります。中世芸能のうち能楽については、大和の国に関係が深く、川西町結崎は能楽観世流の発祥の地として知られています。

子出来おんだ祭り

毎年2月11日の夜に、六県神社で昔から伝わるユニークな御田植祭「子出来おんだ祭」が行われます。お腹に小太鼓を入れ、妊婦に扮した厄年の男子が、田植えをしている夫(神主)のもとへ弁当を持って行く道中に産気づいてしまい、あぜ道で男子を出産。夫は妻のお腹から放り出された太鼓をたたいて喜ぶという、夫婦愛・農耕勤勉を表現した特異なお祭りです。



子出来おんだ祭り

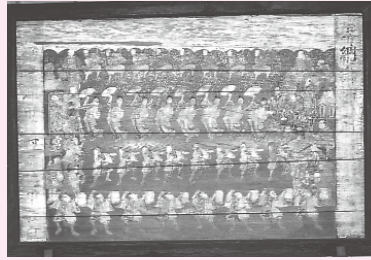


結崎太鼓踊り絵馬「なもで踊り」

身分の高い武士が踊りを見物しており、右隅の木陰では屋台で西瓜を切り売りしている姿が描かれています。この絵馬は大和平野における西瓜栽培の歴史を知るうえで興味深い資料です。太鼓の音は雷を表すことから、雨乞いが行われている図柄でもあります。

結崎おかげ踊り絵馬

高さ1.5メートル、幅1.8メートルの大きなもので、願い事が成就した暁に踊られたと言われています。8人ずつ4列に並んだ踊り子を描き、左右に世話方、はやし方と、太神宮ののぼりを持ったものなどが立っています。



糸井神社

糸井神社は、約千年前の「延喜式」という書物にも糸井社として記されている由緒ある古社（式内社）です。

糸井神社の祭神は同社の縁起に記されているトスキイリヒメノミコト豊鍬入姫命ほか、諸説もありますが、名称のとおり糸に関係があることは確かです。三ノ宮・四ノ宮に祭られている綾羽・呉羽の両神が元の主神のようだとされており、機織りのことに関連した氏族が開拓した土地に殖産興業の神を祭ったものと思われます。境内の奥まったところに本殿・拝殿・宝庫等があり、境内社には、春日大社、大国主・事代主神社相殿、住吉神社、拝殿内側には県の指定文化財である「なもで踊り」・「おかげ踊り」の絵馬が掲げられています。

史跡 島の山古墳

島の山古墳は、奈良盆地の中央部寺川と飛鳥川とに挟まれた標高48メートルの微高地に立地しています。全長200メートル、周囲に濠を巡らした典型的な前方後円墳であり、奈良県下の前方後円墳約300基の中では19番目の規模に相当します。築造されたのは、4世紀末から5世紀初めであったと推定されており、大王クラスの御陵等のいわれがありますが、まだ誰の墓か解っていません。

平成6年より本格的な発掘調査が実施され、前方部の埋葬施設から車輪石・楕形石・石釘の三種類約140点の石製腕飾類や碧玉合子三点・玉製ネックレス三連・左右腕輪・銅鏡三点・小刀および勾玉や白玉を中心とした玉類約1,300個が未盗掘の状態出土しました。これらの出土遺物は国の重要文化財に指定されています。



島の山全体



島の山古墳発掘

川西町マップ

